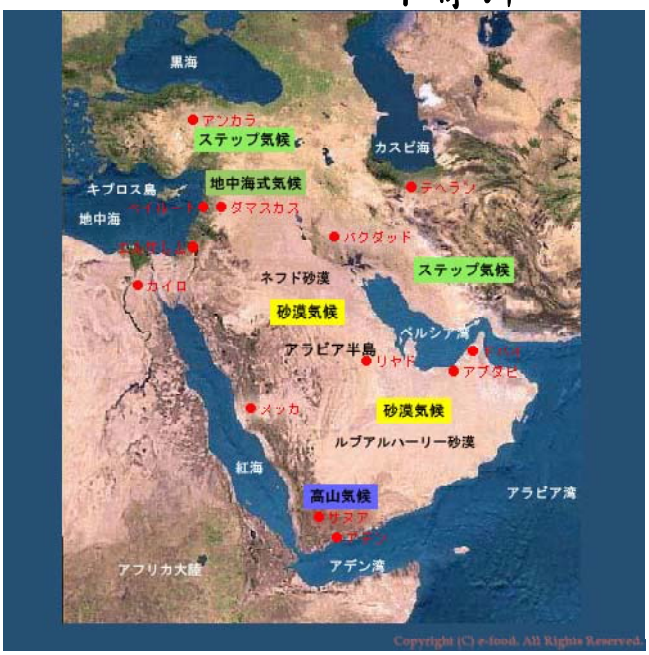
双葉郡（第十八部）

（石油資源を求めて我が国の挑戦１）

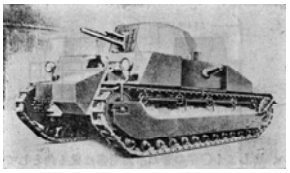
片寄洋一



中東の歴史は文明発祥の地として、東西交易の要路として東西文明の融合地であると共に東西民族の衝突の地でもあり、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の三大宗教が鋭く対立していた地でもある。

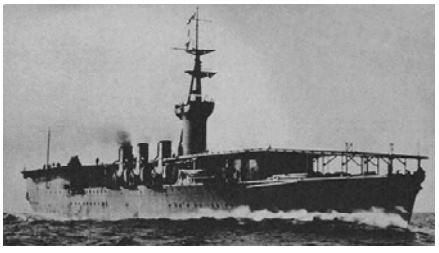
王国が創立されては滅び、蒙古族の大軍団が通過したり、十字軍の遠征があったり、アラブ、ペルシャの対立、帝政ロシアの南下、イギリス軍の進出、オスマン帝国の支配、まさに中東の地は動乱の歴史でもあった。

20 世紀に入ると、石油資源が発見され大国のエゴ剥き出しにした勢力がこの地で再び覇権争いを始めてしまったから混乱に次ぐ混乱を呼び起こしてしまった。



1892 年、ドイツの技術者ルドルフ・ディーゼルが発明した内燃機関は、1893 年 2 月に特許を取得した。ピストンによって空気を圧縮し、シリンダー内の高温空気に燃料を噴射することで自然着火させる仕組みで、蒸気機関に比べるとはるかに軽量、小型化出来、かつ強力な出力を得ることができるので多くの応用面があった。

応用が考えられるのは自動車、飛行機、船舶であるが、第 1 次世界大戦が勃発と同時に飛行機、戦車、兵員・貨物の輸送車として戦場で活躍したが、最新の技術は戦争によって生まれ、使われ、改良されていった。



我が国でも第一次世界大戦で連合軍側であった関係で青島攻撃に際し水上機を貨物船の甲板に搭載して運び、青島近海から発進させて空からの攻撃を初めて行った。

この発想が世界初の航空母艦の着想になって、1921 年世界初の正式艦として航空母艦‘鳳翔’（排水量 7470 トン）が竣工、連合艦隊に編入された。